大学生の進路決定に関する心理学的研究の概観と展望

臨床心理学コース　　石　黒　香　苗

Overview and Outlook of Research Concerning Career Choice among College Graduates

Kanae ISHIGURO

The purpose of this paper is to review the psychological research about career choice among undergraduates. Both the articles from overseas and those from Japan can be divided into three main topics each. International research shows the (a) mutual influence of the career choice and the satisfaction of the choice, (b) difficulties in career-decisions, and (c) compromises one makes about a career. In Japan, most research pertains to the (a) influence on success and satisfaction in choosing a career, (b) process of choosing a career, (c) and psychological process of choosing a career and the effects after choosing a career.

目　次

1．問題と目的
2．文献検索方法と調査対象の決定
3．海外の研究動向
　A．進路決定の内容に影響を与える要因に関する研究
　B．進路決定の評価に関する研究
　C．進路決定の際の困難さに関する研究
　D．進路決定における妥協に関する研究
4．国内の研究動向
　A．進路決定の達成・評価に関する研究
　B．進路決定のプロセスに関する研究
　C．進路決定時および決定後に関する研究
5．研究のまとめと今後の課題及び方向性

1．問題と目的

大学生にとって，卒業後の進路決定は学校から仕事への移行において大きな課題の一つである。発達心理学において，移行はそれ自体が危険（risk）を内包したライフイベントであり，生涯を通じてみられる数々の移行の中でも，学校から仕事への移行は大きな転換期として位置づけられてきた（山本・ワップナー，1992）[48]。しかし職業生活へのスムーズな移行の重要性や発達上の意義は示唆されている一方で，近年の大学生の就職活動は過酷である。大学生の就職活動が厳しさを増す中で，「就活うつ」や「就職失敗による自殺」の増加などの現象もみられるようになっており（李，2014）[14]，実証的研究においては，就職活動経験のある者とない者を比較したところ，経験のある者のほうが，有意に精神的健康状態が悪いことが示されている（北見・茂木・森，2009）[19]。また，近年では進路選択における価値観や選択肢が多様化し，その中で主体的な選択や判断が求められているという（白井，2002）[33]。

大学生の進路決定に関する心理学的研究は，以前から進路決定前の段階に焦点を当てた研究が多く，実際の進路決定時や前後に関する検討が蓄積されていないことが課題として指摘されてきた。

例えば，これまで多く行われてきた「進路不決断研究」では，進路不決断を「本人の意思として「希望する進路」が見つかっていない状態」として捉え，主に大学1，2年生を対象とした研究がおこなわれてきた。しかし，厳しい就職状況が続く現代では，必ずしも希望進路を叶えられるとは限らず，「進路未決定者」ではない場合，つまり，本人の希望する進路が見つかっている場合でも，自分の希望や夢を実現させたいという固定的な考えを持つことが，緊張や不安を増大させ，場合によっては最終的な就職決定に支障をきたす可能性も指摘されている（田澤・梅崎，2012）[39]。さらに，本人の意思として希望する進路がない状態，すなわち進路未決定者でも，実際には卒業後の進路を獲得し得るものもいるだろう。よって，進路未決定の状態が実際の進路決定においてどの程度問題になるかが

明確でないとも考え得る。

また，「進路選択自己効力感」の観点からの研究でも，多くが進路決定前の大学１，２年生を中心とした研究であるため，進路選択に対する意識や態度面の考察に留まっており，実際の「進路決定を行う」際に焦点を当てた研究は十分ではないことが指摘されていた（田澤，2003）[38]。

近年では，実際の進路決定やそこに至るまでの過程における心理学的研究が散見されるようにはなったものの（矢崎・斎藤・高井，2007）[46]，その実態が把握できているとは言い難い。よって，本研究では，進路決定の定義を「自分自身の進路先を決定し，さらに進路先がその意思決定者の採用を決定した状態（横山，1996）[49]」とし，進路決定の前段階の研究ではなく，進路決定時やその前後に関する心理学的研究を概観し，近年の大学生の進路決定における困難や課題はどのようなことがあるか，という点について把握する。上述したように就職活動の厳しさが増していく中で，就職先を決定するまでの道のりは学生にとって非常にストレスのかかるものであり，就職活動は，心身共に大きな負担を強いられる活動であることは想像するに難くない。実際，このような状況に伴い，ハローワークには臨床心理士などが配置され，心理的なサポートを行う取り組みが平成22年度から行われるようになっており,臨床心理士の介入に役立つ知見が求められていると考えられる。よって，本研究では，大学生の進路決定に関する困難や課題の実態把握に留まらず，それらに対する今後の研究課題について臨床心理学的に考察することを目的とする。

２．文献検索方法と調査対象の決定

国内の文献，海外の文献の双方において2016年９月１日に検索を行い，1990年以降に行われた研究を収集した。国内の文献については，検索エンジンCiNiiを利用し「大学生　進路決定　心理」「大学生　就職決定　心理」をキーワードとして検索を行い，この中で実証的な研究を行っている28件が対象となった。なお，ここでは上述した定義における進路決定の研究を概観するため，進路決定段階以外（就職活動以前）の「進路決定」に関する研究については触れていない。海外の文献については検索エンジンPsycInfoを利用し，“career choice，undergraduate”をキーワードとして検索を行った。その結果の中で実証的研究20件が対象となった。このため，国内と海外の文献を合わせて48件を対象として考察を行うこととした。

３．海外の研究動向

海外の研究は大きく４つに分類できた。１つ目の研究の流れは，進路決定の内容に影響を与える要因に関する研究である。２つ目は，進路決定の評価に関する研究である。また３つ目は，進路決定の際の困難に関する研究である。そして４つ目は進路決定の妥協に関する研究が挙げられる。

Ａ．進路決定の内容に影響を与える要因に関する研究

最初に，進路決定の内容，つまり，どのような進路を選択したか，ということに関する研究を概観する。進路決定の内容に関する研究は専門職を選択する者や親と同様の職業を選択する者に着目した研究が行われている。

まず，専門職に関する研究では，専門職の選択要因を検討するものが多くみられる。例えばMazerolleら（2012）[22]は，体育系のキャリアを選択する者においては，学科や医療サポーターからの支援，専門分野の市場価値についての認識，専門性の発達が背景要因として見出され，それ以外の進路決定を行う場合においては，専門性に対する重要性認識の欠如，興味のうすれ，妥協などが要因として示唆された。また，エンジニアとしての進路選択においては，男子学生は内的な要因から大きな影響を受けるのに比べ，女子学生は外的な要因から影響を受けやすいことが明らかになっている（Gokuladas，2010）[9]。さらに，Parkesら（2012）[30]は音楽専攻の学生の進路決定に関して調査を行い，音楽教師という進路決定には，達成可能性の認識が最も大きく影響を与え，続いて，関心，期待が影響要因となることが示唆された。一方，演奏家という進路決定においては，期待の影響力が最も大きく，続いて達成可能性の認識，才能の評価，関心が65％予測することが示された。また，文化的マイノリティーの学生の進路決定に関して大学教育のどのような側面がどの程度影響を及ぼしているかを探索的に検討した研究では，授業内容，指導，研究やインターンシップが進路決定に大きな影響を与えることが示唆されている（Sweeney & Villarejo，2013）[36]。

進路決定の内容に関する研究は，専門職のみならず，親と同様の職業を選択する要因の検討も見受けられる。例えば，Orenら（2013）[29]は，親から子への世代間の職業的伝達について検討し，親と同様の職業に

就く意思は，親の職業への肯定的態度，親の職業に関する主観的規範（親と同様の職業に就くことを周囲から求められているという認識），親と同様の職に就くことに対する自信，の3つの要素によって予測されることを示した。その中でも，主観的規範の影響が最も強いことが明らかとなっている。また，Workman (2015)[45] は，インタビュー調査を通して，多くのインタビュイーが進路決定において親から心理的サポートを受けていると同時に，親の職業と類似するものを選択しやすいことが示した。また，大学生の進路決定に親がどの程度影響を与えているかを検討した研究では，男女とも，母親よりも父親との親密性が子どもの進路決定に影響を与えることを明らかにした (Hoffman, et al, 1992)[11]。

以上より，進路決定の内容は，専門職，親と同様の職業，両者とも，個人の内的な要因と，外的要因の両者から影響を受けていることが推測される。

B．進路決定の評価に関する研究

次に，進路決定の主観的・客観的評価に関する研究を概観する。

進路決定の主観的・客観的評価に関する研究では，様々な指標が用いられている。例えば，Werbel (2000)[44] では，進路決定プロセスにおける自己探求・環境探求は就職活動量を媒介してのみ就職先の初任給に影響を及ぼすことを示したが，それらの就職先への満足度との相関は有意ではないことも明らかになった。また，Bullock-Yowell（2011）[3] は，進路決定の充実感に関する検討を行い，進路選択及び生活上のストレスと進路決定の充実感の間には直接的な関連がみられないことを示した。しかし，進路選択及び生活上のストレスは進路決定に関するネガティブな考えの増加と相関があり，このネガティブな考えを媒介して，進路決定及び進路決定における充実感を阻害することが明らかになっている。Bertoch ら（2013）[1] は，進路決定後の目標の不安定さが，キャリアに対する否定的な認知，進路決定先への不満感，キャリア不安と関連していることを示した。

以上より，進路決定の評価については，進路決定の客観的評価（就職先の給与や職種など）のみならず，満足感や充実感などの主観的評価も着目されていることが分かる。このことは，個人の進路決定先に対する満足感のような主観的評価の重要性の認識が高まってきていることを意味すると考えられる。

C．進路決定の際の困難さに関する研究

続いて，進路決定の際の困難さ（Career Decision-making Difficulties）に関する研究を概観し，その内容や要因について整理する。進路決定の際の困難さは，Gati ら（1996）[7] により，進路決定以前の困難と，進路決定のプロセスの中で生じる困難の大きく2種類に分けられている。まず，進路決定以前の困難として，レディネスの欠如が挙げられており，a) 進路決定への動機づけの欠如，b) 決定行動全般に関する苦手，c) 混乱型認知（高すぎる期待等）が含まれている。また進路決定のプロセスの中で生じる困難として，情報の欠如と一貫性のない情報が挙げられている。情報の欠如には，a) 進路決定の方法に関する知識不足，b) 自己理解の欠如，c) 様々な進路に関する情報の欠如，d) 情報を得る方法に関する知識不足　が含まれている。また，一貫性のない情報には，a) 信頼性の低い情報，b) 内的葛藤，c) 外的葛藤が含まれている。

近年では，この進路決定の際の困難さへ影響を及ぼす要因の検討がなされている。例えば，Liu ら (2006)[21] は，進路決定における困難さと自己効力感の関連を検討し，自己効力感が高いほど，困難さは抑制されることを示唆している。また，Hou ら (2013)[13] は，両親の感情的温かさが進路決定の困難さに与える影響を検討し，両親の感情的温かさは，個人の性格としての綿密さを媒介して，大学生の進路決定の際の困難さを抑制することを示唆した。このことから，両親の温かさは，大学生の個人特性のうち「綿密さ」を養うことに寄与しており，そのことが結果的に内的動機づけを促進し，進路決定が促進される可能性が指摘されている。

以上より，進路決定の際の困難さは，進路決定以前の困難と，決定プロセスの中で生じる困難に分けられており，それらに影響を及ぼす要因への注目が高まっていることが考えられる。

D．進路決定における妥協に関する研究

最後に，進路決定における妥協（Career Compromise）に関する研究を概観し，研究の流れや課題について検討する。

進路決定における妥協についての研究の多くは，Gati（1993）[6] や，Gottfredson（1996）[10] の理論を基に行われている。Gati（1993）[6] では，理想の進路決定と現実のギャップに取り組む際に必要となる「妥協」のタイプを3つに分け議論している。それらは，①一番理想に近い進路決定から可能な（しかし理想からは

離れてしまう）進路決定まで，多様な選択肢間における妥協，②多様な要素についての相対的重要性における妥協，③重要な要素のレベルにおける妥協（室内で働く仕事がいいが，ある程度外での勤務も許容する，など）である。Gati（1998）[8] は，これら 3 つのタイプの妥協の程度と困難度を比較した。その結果，タイプ①の場合の困難度と妥協の程度が，タイプ②やタイプ③よりも高いことが明らかとなった。

進路決定の認知的プロセスを検討したGottfredson（1996）[8] では，進路決定における「妥協」に関連する 4 つの理論を提示している。その中でも注目されているのが妥協における性別，社会的地位，興味関心の重要性に関する理論である。この理論によると，進路決定における妥協の程度が低い者は，自身の興味・関心を最も重要と捉えており，続いて社会的地位，性別の順に重要度が下がっていく。また中程度の者は，社会的地位を最も重要視し，続いて興味・関心，性別の順となっている。一方で，妥協の程度が高い者は，性別を重要視し，続いて社会的地位，興味・関心の順となることが主張されている。この理論の追試を行ったBlanchardら（2003）[2] の研究では，進路決定における妥協の程度が低い者は，自身の興味・関心を最も重要と位置づけ，続いて社会的地位，性別（職場における男女比）の順に重要度が下がっていき，Gottfredsonの理論と同様の結果となった。しかし，中程度の者と高い者は，社会的地位と性別の重要度に有意差がみられず，興味・関心の重要度が有意に低い結果となった。このような結果の違いは，Gottfredsonの研究が1996年以前にアメリカで行われ，Blanchardの研究が同国で2000年以降に行われたことを考えると，時代の移り代わりによって生じた結果とも考え得る。

また，文化的背景によって結果が異なることも推測される。例えば，Joengら（2013）[17] による韓国での研究では，韓国の大学生の多くは，進路決定を行う際，社会的地位を最優先し，職業における男女比や自身の関心については妥協をする傾向があることが示唆されている。これまでの研究では，進路決定の状況について考慮されずに検討されてきたが，Wee（2014）[43] は，進路の選択肢が多い場合と少ない場合という状況の差に着目し，異なる状況下での妥協について検討した。その結果，進路の選択肢が少なく，非常に大きな妥協をしなければならない状況においては，性別（職場や職業における男女比）が重要視されることが示唆された（Wee，2014）[43]。また，この調査では，女性のほうが男性よりも性別を重要視する程度が大きいことも示された。

さらに，進路決定における妥協と進路決定状況や心理的困難さの関連を検討した研究も見受けられる。例えば，Gadassiら（2012）[5] は，進路決定直前の大学生に対して進路決定に関する態度と困難さの関連を検討した結果，進路決定に関する状態の一側面である，妥協の意思の強さが進路決定の困難さを予測する因子にはならないことが明らかにした。

以上より，進路決定における妥協について扱った研究の結果は，時代や文化などによって異なることが考えられる。また，進路決定における妥協と心理的困難さ及び進路決定状況等の関連は未だ明らかでなっておらず更なる検討が必要であると思われる。

4．国内の研究動向

我が国における進路決定の研究については，大きく三種類に分類できる。1 つ目の研究の流れは，進路決定の達成や，進路決定先に対する主観的評価に関する研究である。2 つ目の流れは進路決定のプロセスを質的・量的に捉えようとする研究，そして 3 つ目は，進路決定時および決定後に関する研究である。

A．進路決定の達成・評価に関する研究

最初に，就職活動を終え，就職先が決まった状態（進路決定の達成）と，就職先に対する満足感等の主観的評価に関する研究の流れを概観する。

まず，進路決定の達成に関する研究では，主に，達成を促す要因の検討が行われている。例えば，中島・無籐（2007）[23] は，対人志向や挑戦志向といった就職動機，目標に向かう意思を高めることにより進路決定の達成が促進されることを示した。また，浦上（1994）[40] では，進路選択に対する自己効力と就職先の決定率の間に有意な結果を示唆している。

進路決定に対する主観的評価は，「満足感」「充実感」「納得感」の主に 3 つの指標が用いられている。まず，進路決定の「満足感」に影響を与える要因の研究では，進路選択に対する自己効力感が高いほど就職先への満足感が促進されることが明らかになっている（浦上，1994）[40]。また，大学生の就職活動と自己効力を縦断的に研究した佐藤（2016）[31] は，大学 3 年時の特性的自己効力感が高ければ，就職活動に取り組みやすいこと，さらに，進路決定時に内定先に対する満足度も高く，特性的自己効力感も高い状態で就職活動を終えられることを示した。進路選択行動と満足度の関連を検

討した竹内・竹内（2010）[37] では，職務探索行動が就職先への満足度に正の影響を及ぼすことを明らかにした。また，進路決定の主観的評価ついて質的に調査した研究では，決定進路が就職活動開始時に志望していた就職先でなくても満足度が低下しない理由を検討している。その結果，理由として「活動中に志望先が変化すること」等があることを示唆した（稲田・田澤，2009）[15]。

近年では，満足度に対する将来展望の影響も着目されており，下村ら（2009）[32] は，「アクション」（将来に向けての行動）と「ビジョン」（将来やりたいことの明確化）の両得点共に高い者は就職活動における活動量が多く，進路決定先への満足度も高いことを明らかにしている。

次に，進路決定の「充実感」に関する研究では，神近（2013）[18] において「将来像に関する決定感覚」が進路決定に関する充実感を高めることが明らかになっている。下村ら（2009）[32] や神近（2013）[18] で，主観的評価における未来志向の重要性が検討されている一方で，未来志向単独ではなく，未来志向と現在志向が両立したときに最も進路決定における自己効力感が高まり，充実感も高くなることも示唆されている（園田，2003）[34]。

決定した進路への「納得感」に影響を与える要因に関する研究では，進路選択の際に「働き方」や「大学の専門」を重視しない者ほど納得感が高くなることが示されている（若松，2010）[42]。

以上より，主観的評価に関しては，「満足感」のみならず「充実感」や「納得感」といった多様な指標が使用されていることが分かる。また，進路決定の達成や主観的評価には，自己効力感や進路選択行動，時間的展望，就職意識など様々な要因が関連していることが明らかになっている。これらの研究の流れから，国内の研究でも海外の研究と同様に，進路決定の達成といったような客観的評価指標よりも，進路決定先への本人の満足度といったような主観的評価指標への関心が広がっていることが推測される。

B．進路決定のプロセスに関する研究

次に，進路決定までのプロセスに関連する研究を概観する。進路決定のプロセスに関する研究では，進路決定行動の促進要因や，進路決定行動の中で変化する様々な変数が見出されている。プロセスの中で変化する変数は，主に進路決定において重視される要素，時間的展望，心理状態の 3 つの側面から検討されている。

進路決定行動において重視される要素は，パーソナリティによって異なることが指摘されており（楠見，1994）[20]，例えば，回避傾向の高い者は，「周囲の人の影響」や「自分の属する集団への配慮」に重きをおくことが示されている。また，重視される要素は進路決定プロセスにおいて変化することも明らかになっている。進路決定プロセスの初期段階では「会社の知名度や人気」が重要視されることが多いが，最終決定時では「仕事の内容」が最も重要性が高く，続いて，「社風」，「会社の人の印象」の重要性が高まり，「会社の知名度や人気」は重視されなくなるという（楠見，1994）[20]。大学生の進路決定時期と決定理由についての検討を行った研究では，大学生が希望進路を決定する時期は大学入学時と大学三年生後期が多いということが明らかになり，最終的な就職先の決定基準としては，「その企業の雰囲気・考え方」が最も多く，続いて「自分の関心」，「自分の将来像」，「分野・業種を広げた後に狭くして比較」という結果となった（田澤，2003）[38]。以上より，重視される要素の変化に伴って希望進路が変化し，最終的な進路決定に至ることが推測される。大学四年生の進路決定の時期における希望進路の変更は，以前の希望進路の選択に適用した内的基準を見直してというよりは，実習や説明会などで，新たな情報を入手してというものが多いことも示されていること（若松，1992）[41] から，このような外的なイベントによって重視される要素が変化する可能性も示唆される。

進路決定のプロセスにおいて変化する変数の一つとして「時間的展望」も挙げられる。奥田（2003）[27] は職業選択過程における時間的展望の変化を質的に検討し，職業選択過程において，大学生らは自らの過去に対する意味づけを変容させていくことや，職業選択過程が進むにしたがって，未来展望に関する語りが変化し，明確化されていくことを明らかにした。

最後に，進路決定のプロセスにおける感情の変化を検討した研究では，就職活動の心理的プロセスは蛇行的であることが明らかになっている。また，希望の進路の発見は心理的プロセスを安定させるきっかけとなるが，その後の就職活動の停滞などに伴い感情の変化が大きい場合もあることが分かっている（西村・種市，2011）[26]。

以上のように，進路決定のプロセスにおいて，「重視される要素」や「時間的展望」は変化し，その過程で志望する職業を選択し直すことが推測される。ま

た，進路決定時のみならずその前後で感情の大きな揺れが体験されていることが示唆されている。

C．進路決定時および決定後に関する研究

ここでは，進路決定時および決定後に関する研究について概観する。進路決定時および決定後に関する研究では，「進路決定後の肯定的変化」と「進路決定時及び決定後の心理的困難」についての主に 2 つの側面から検討されている。

まず，進路決定後の肯定的変化に関する研究から概観する。大圖（2007）[28] では，進路決定経験が女子大学生にどのような変化をもたしたかを検討し，「職業的対処スキルの向上」「社会的サポートへの気づき」等の変化を見出した。さらに，就職活動を終え，進路決定を達成した群は，コミュニケーションスキル等の向上，感情統制について成長したと感じているという結果が明らかになっている（中嶋，2015）[25]。杉村（2001）[35] は，「就職活動・職業決定」が，関係性レベルのアイデンティティ変化を最も強く促進することを示したと同時に，進路決定までの一連の作業が，大学生のアイデンティティ形成の幅広い領域において意義を持つことを明らかにした。このような進路決定経験のもたらす肯定的変化に関する研究は，決定直後のみならず入職後についても検討されており，進路決定行動における挑戦志向が入職後職務における意思や行動に関連することや，意思に媒介されて職務遂行へ寄与することが示されている（中島，2011）[24]。

以上のように，進路決定後の肯定的な変化が検討されている一方で，進路決定時及び決定後の心理的困難に関する研究も蓄積されつつある。

まず，進路決定時の心理的困難についての研究では，進路決定時における悩みに関する検討が行われており，「自己の内的基準のあいまいさに関わる問題」と「自己と外的状況との調整に関わる問題」の 2 つの悩みを示唆している（本多，2009）[12]。これらの悩みの背景には，「進路決定は変更してはいけない」という固定的な考え方や「社会的評価が決められてしまう」という受け身的な捉え方が関係していることが示されている。また，進路決定時のストレスに関する研究も遂行されており，男性に比べて女性のほうがストレスを感じやすいことが明らかになっている（藤里・小玉，2011）[4]。さらに，進路決定におけるネガティブな反応スタイルは，決定ストレスが高く，職業レディネスにおいて「偶然重視」や「回避」傾向の者が取りやすいことも示唆されている（楠見，1994）[20]。

近年では，進路決定時における心理的困難のみならず，進路決定後の心理的困難も着目されつつあり，主に，決定後の就職不安（就職決定後における将来に対する否定的な見通しや絶望感）に関する研究が行われている。石本ら（2010）[16] は，就職活動満足度や内定先満足度が就職不安を抑制し，活動や内定先満足度は内定先が元々志望していたところであったかどうかの影響を受けることを明らかにした。このように志望していた会社に内定するかどうかが就職不安の高低を決める決定的な要素である可能性を指摘する一方で，志望していた就職先でも結果を外的要因に原因帰属させる人は就職不安が高まることも明らかになっている（石本ら，2010）[16]。また，就職決定後の就職不安低減要因を検討した矢崎・斎藤（2014）[47] では，就職活動中に情報探索行動を多く行った上，さらに入社前研修に参加することが不安低減に効果的であることを示している。

以上より，進路決定の経験は自己成長感やアイデンティティ形成などの肯定的な変化をもたらす一方で，進路決定に伴う悩みやストレス，進路決定後の就職不安の出現などの心理的困難も体験されることが明らかになっており，そういった心理的困難の援助に役立つ知見の蓄積が求められていると考える。

5．研究のまとめと今後の課題及び方向性

これまで，国内外における「進路決定」に関連する研究の動向について概観してきた。ここでは，研究全体をまとめ，我が国における研究の課題と今後の方向性について述べる。

まず，海外の研究では，進路決定の内容や評価に影響を与える要因に関する研究が多く見受けられた。進路決定の内容に関する研究では，専門職や親と同様の職種を選択する者に着目したものがほとんどであった。また，進路決定の評価においては，近年では進路決定先の給与等の客観的評価よりも本人が進路決定をどう受け止めているか，というような主観的評価への関心が広がっている可能性が示唆された。さらに，海外の研究では進路決定の際の困難さに関する研究や進路決定における妥協に関する研究が多く行われていることが分かった。その中でも，進路決定における妥協に関する研究では，妥協と心理的困難さ及び進路決定状況等の関連が未だ明らかでなっておらず更なる検討が必要であることが推測された。

続いて，国内の研究では海外と同様に，進路決定の

評価に影響を与える要因に関する研究が多かったものの，海外で行われているような進路決定の内容に関する研究はほとんど見られなかった。これは，国内における「進路決定」の研究の多くが，文系の就職活動を行う大学生を対象に行われており，理系あるいは文系の専門職を選択する学生を対象としたものがほとんどないことを示していると考えられる。また，進路決定時及び決定後に関する研究も多く，進路決定経験は肯定的な変化をもたらす一方で，様々な心理的困難も体験されることが明らかになっているものの，決定時及び決定後の心理的困難への介入に役立つ知見はほとんどないと言えるだろう。

ここまでの国内外の研究の概観に基づいて，我が国における「進路決定」の課題を示し，進路決定において心理的困難を抱える大学生に対する援助に結びつく知見を蓄積するために必要な視点を三点挙げたい。

第一に，上述したように国内外で未だ明らかになっていないのが，「進路決定における妥協」と心理的適応の関連である。妥協はほとんどの進路決定のプロセスに内在する特徴であり（Gati，1993; Gottfredson，1996）[6)10)] 妥協の意思が強いほど適応が良いこと（Gati，1993）[6)] が先行研究から予測されるものの，Gadassira（2012）[5)] の研究ではほとんど結果がみられなかった。今後，国内外において妥協の意思と心理的適応の関連のみならず，どのような妥協の方法が進路決定という課題に向き合う大学生の心理的適応を促進，または阻害するかということについての検討を行うことが，就職決定直前や決定後の大学生の臨床心理学的援助において役立つ知見となることが考えられる。

また，近年では，進路決定における否定的な影響（就職不安の出現，不満感等）に関する研究もいくらか見受けられるが，上述したように臨床心理士による介入に寄与するような知見が十分に蓄積されているとは言い難い。よって，第二に，就職決定先の否定的評価に関する検討を行うことが求められていると考える。国内の先行研究においては，進路決定の主観的評価について主に進路決定の「満足感」や「充実感」の規定要因が検討されている（浦上1994；下村，2009；神近，2013等）[40)32)18)]。しかし，進路決定後の主観的評価に関する研究は，そういった肯定的評価についての検討に留まっており，不満感などの否定的評価についての検討は十分であるとは言い難い。

第三に，志望度が低い会社に就職決定した者への着目した研究である。先行研究では，志望していた企業から内定を得ることができた場合には，就職活動やその結果に対する評価が満足，納得できるものとなり，そのことで就職不安が低減されることが明らかとなっている（石本，2010; 矢崎・斎藤，2014）[16)47)]。よって，進路決定先の志望度が低い場合は，就職決定後の就職不安が高まりやすく，入職後にも影響を及ぼすことが推測される。そのため，特に志望度が低い会社に決定した者において，どのように就職不安などの心理的困難を緩和するか，という視点での検討が求められていると考える。特に，就職不安の低減を目指す臨床心理学的援助への寄与という観点においては，介入可能な要因を検討することが必要となる。そのことで，例え志望度が低い会社に決定したとしても，不安感や不本意感に拘泥せず，適応的に就職へと移行するための援助への提言が可能となるだろう。主観的評価と未来志向の関連が指摘されていること（下村，2009；神近2013）[32)18)] や進路決定の際に重視する事柄が納得感と強く関連していること（若松，2010）[42)] などから，時間的展望の志向性や信念が関連する可能性が考えられるため，今後はこれらの先行研究から導き出された仮説を実証的に検証していくことが求められる。

引用文献

1）Bertoch，S. C.，Lenz，J. G.，Reardon，R. C.，& Peterson，G. W. (2013). Goal Instability in Relation to Career Thoughts，Decision State，and Performance in a Career Course. *Journal of Career Development*，*41*(2)，104-121.

2）Blanchard，C. A.，& Lichtenberg，J. W. (2003). Compromise in career decision making: A test of Gottfredson's theory. *Journal of Vocational Behavior*.

3）Bullock‐Yowell，E. (2011). Relationships among career and life stress，negative career thoughts，and career decision state: A cognitive information processing perspective. *The Career Development Quarterly*，*59*(June)，302-315.

4）藤里紘子，小玉正博. (2011). 首尾一貫感覚が就職活動に伴うストレスおよび成長感に及ぼす影響. *教育心理学研究*，59(3)，295-305.

5）Gadassi，R.，Gati，I.，& Dayan，A. (2012). The adaptability of Career Decision-Making Profiles. *Journal of Counseling Psychology*，*59*(4)，612-622.

6）Gati，I. (1993). Career compromises. *Journal of Counseling Psychology*，*40*(4)，416-424.

7）Gati，I.，Krausz，M.，& Osipow，S. H. (1996). A taxonomy of difficulties in career decision making. *Journal of Counseling Psychology*，*43*(4)，510-526.

8）Gati，I，Houminer D，Aviram T. (1998). Career compromises: Framings and their implications. *Journal of Counseling Psychology*，*45*(5)，505-514.

9）Gokuladas, V. K. (2010). Factors that influence first-career choice of undergraduate engineers in software services companies: A south Indian experience. *Career Development International*.
10）Gottfredson, L. S. (1996). Gottfredson's Theory of Circumscription, Compromise, and Self-Creation. *Career Choice and Development*.
11）Hoffman JJ, Hofacker C, Goldsmith EB. (1992). How closeness affects parental influence on business college students' career choices. *Journal of Career Development, Vol.19(1)*
12）本多陽子. (2009). 大学生が進路を決定しようとするときの悩みと進路決定に関する信念との関係. 青年心理学研究, (20), 87-100.
13）Hou, C., Wu, L., & Liu, Z. (2013). Parental Emotional Warmth and Career Decision-Making Difficulties: A Model of Intellectual-Cultural Orientation and Conscientiousness. *Social Behavior and Personality*, *41*(8), 1387-1397.
14）李敏子 (2014). 大学生の就職活動における心理的問題と援助のあり方　椙山女学園大学学生相談室活動報告, 7, 3-12.
15）稲田恵, & 田澤実. (2009). 就職活動を行う大学生の希望進路の変化と内定先の満足度の関連－キャリア「RE」デザインの観点から－. 生涯学習とキャリアデザイン, *6*, 99-130.
16）石本雄真, 逸身彰子, & 齊藤誠一. (2010). 大学生における就職決定後の就職不安とその関連要因. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, *4*(1), 143-149.
17）Joeng, J. R., Turner, S. L., & Lee, K. H. (2013). South Korean college students' holland types and career compromise processes. *Career Development Quarterly*, *61*(1), 64-73.
18）神近裕樹. (2013). 大学生の進路決定における充実感と関連要因について. 九州大学心理学研究：九州大学大学院人間環境学研究院紀要, *14*, 97-106.
19）北見由奈・茂木俊彦・森和代 (2009). 大学生の就職活動ストレスに関する研究：評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響. 学校メンタルヘルス, *12*, 43-50.
20）楠見孝. (1994). 社会4021 大学生の就職活動における意思決定過程 : 意思決定のストレスと職業レディネスが反応スタイルに及ぼす効果. 日本教育心理学会総会発表論文集, (36), 249.
21）Liu, C., Hao, F., & Li, S. (2006). Career Decision-making Difficulties of College Students and Its Relationship with Self-efficacy. *Chinese Journal of Clinical Psychology*, *14*(5), 502-503.
22）Mazerolle, S. M., Gavin, K. E., Pitney, W. A., Casa, D. J., & Burton, L. (2012). Undergraduate athletic training students' influences on career decisions after graduation. *Journal of Athletic Training*.
23）中島由佳, & 無藤隆. (2007). 女子学生における目標達成プロセスとしての就職活動：コントロール方略を媒介としたキャリア志向と就職達成の関係. 教育心理学研究, *55*(3), 403-413.
24）中島由佳. (2011). 大卒女子入職者の初期適応の規定因―目標達成志向および情緒的適応の観点からの縦断調査―：*教育心理学研究*, *59*(4), 402-413. 2
25）中嶋みどり. (2015). 本学部学生の就職活動によるソーシャルスキルの向上と自己成長感との関連. *広島国際大学心理学部紀要 = The Bulletin of Faculty of Psychology, Hiroshima International University*, *3*, 61-69.
26）西村圭子, & 種市康太郎. (2011). 大学生の進路決定における心理的プロセスに関する記述的研究(1). 心理学研究：健康心理学専攻・臨床心理学専攻, *1*, 46-60.
27）奥田雄一郎. (2003). 大学生の語りからみた職業選択時の時間的展望–青年期の進路選択過程における時間的展望の縦断研究. 中央大学大学院研究年報, (33), 167-180.
28）大圖香里. (2007). PE035 進路決定活動経験は, 女子大学生にどのような変化をもたらすのか. 日本教育心理学会総会発表論文集, (49), 452.
29）Oren, L., Caduri, A., & Tziner, A. (2013). Intergenerational occupational transmission: Do offspring walk in the footsteps of mom or dad, or both? *Journal of Vocational Behavior*, *83*(3), 551-560.
30）Parkes, K. A., & Jones, B. D. (2012). Motivational Constructs Influencing Undergraduate Students' Choices to Become Classroom Music Teachers or Music Performers. *Journal of Research in Music Education*, *60*(1), 101-123.
31）佐藤舞. (2016). 大学生の就職活動および自己効力の縦断的研究, 教育心理学研究 *64*(1), 26-40.
32）下村英雄, 八幡成美, & 梅崎修. (2009). 大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発. キャリアデザイン研究, *5*, 127-139.
33）白井利明. (2002). 大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関する追跡的研究(IV) : 大卒 5 年目における就職活動の回想. *大阪教育大学紀要. IV, 教育科学*, *51*(1), 1-10.
34）園田直子. (2003). 大学生の進路決定と現在指向. 久留米大学心理学研究, *2*, 63-70.
35）杉村和美. (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求 : 2 年間の変化とその要因. 発達心理学研究, *12*(2), 87-98.
36）Sweeney, J. K., & Villarejo, M. (2013). Influence of an academic intervention program on minority student career choice. *Journal of College Student Development*, *54*(5), 534-540
37）竹内倫和, & 竹内規彦.(2010). 新規参入者の就職活動プロセスに関する実証的研究. 日本労働研究雑誌, No. 596, 85-98.
38）田澤実. (2003). 大学生の進路決定時期と決定理由–就職活動前後の大学 3 年生, 大学 4 年生を対象にして. 中央大学大学院研究年報, (33), 181-193.
39）田澤実, & 梅崎修. (2012). PC-065 キャリア意識(CAVT)が就職活動結果に与える影響 : 全国の就職活動生を対象にした縦断データより(発達, ポスター発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, (54), 302.
40）浦上昌則. (1994). 女子学生の学校から職場への移行期に関する研究 :「進路選択に対する自己効力」の影響. 青年心理学研究, (6), 40-49.
41）若松養亮. (1992). 583 就職活動の事前・事後における進路意思決定について : 教育心理学科の大学生を対象とした面接調査から (社会B(7), 口頭発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, (34), 297.
42）若松養亮. (2010). K070 大学生の進路意思決定における適合の判断 : 3 年次生が就職活動前に重視する選択の観点と意思決定遅延の関連(口頭セッション12 キャリア・進路2). 日本教育心理学会総会発表論文集, (52), 292.
43）Wee, S. (2014). Compromises in career-related decisions: Examining the role of compromise severity. *Journal of Counseling Psychology*,

61(4), 593-604.
44) Werbel, J. D. (2000). Relationships among Career Exploration, Job Search Intensity, and Job Search Effectiveness in Graduating College Students. *Journal of Vocational Behavior*, *57*(3), 379-394.
45) Workman, J. L. (2015). Parental influence on exploratory students' college choice, major, and career decision making. *College Student Journal*, *49*(1), 23-30.
46) 矢崎裕美子, 斎藤和志, & 高井次郎. (2007). PA042 就職に関する情報探索行動尺度の作成(2) : 就職活動の結果に与える影響. 日本教育心理学会総会発表論文集, (49), 42.
47) 矢崎裕美子, 斎藤和志. (2014). 就職活動中の情報探索行動および入社前研修が内定獲得後の就職不安低減に及ぼす効果. *実験社会心理学研究*, *53*(2), 131-140.
48) 山本多喜司, & Wapner, S., (1992). *人生移行の発達心理学*. 京都: 北大路書房.
49) 横山明子. (1996). 社会 4-PC8 大学生の進路決定における情報の役割(2). 日本教育心理学会総会発表論文集, (38), 288.

（指導教員　高橋美保准教授）